

美しい時代へ—東急グループ

モノにこだわり、モノを楽しみ、モノを愛する人々へ。

HANDS BOX

TOKYU HANDS NAGOYA MESSAGE MAGAZINE

Hands to hands
つながる心

Vol. **09**
TAKE FREE

マラソンで地球一周
766日を支えた絆

間 寛平

大分の山里で受け継がれる
小鹿田焼のモノ語り
うつわに息づく絆

もっと便利に、もっと楽しく
つながって
パワーアップ↑

CREATIVE LIFE STORE
**TOKYU
HANDS**

モノを結ぶ ちよっといいモノ語り

東急ハンズのプロアに並ぶたくさんのモノたち。そのひとつひとつに、かかわる人たちの語り尽くせないほどの物語が秘められている。深い思いがあって初めてモノが生まれ、人とのつながりを通して世に送り込まれ、そして、ハンズを通してお客様の手に渡る。モノの裏に描かれた、モノと人、人と人の絆。ちよっといい…でもとても深いモノ語り。



吐き捨てガムの除去活動は、2009年7月から東京都内を中心に実施。小学生や中学生も参加している。ふらっと参加した大学生がやり甲斐を感じて、自ら継続して活動を行う例もある



左手に除去したガムを入れるコップを持ち、片手で「ガム取り棒」を使う新樂さん。この道具のおかげで楽に作業できるようになった。刃を裏返して使うのは「ちよっとしたテクニック」という

商品化にあたって町工場で製造するようになったが、つくりそのものは考案者の手製のプロトタイプとほとんど同じ
ポンプ式ガム取り棒セット No.1万500円



スクレーパーは刃物の産地、新潟の高三製の特注品。真鍮ブラシは指の保護のために柄にプラスチック製ガードを付けたアイデア商品。関連グッズにもこだわりや手づくり感がある
ガム取り4点セット No.2,625円

「タバコのポイ捨てははずい分減りましたが、ガムの吐き捨てはまだ多いんですよ」という新樂智夫さん。意外と見過ごしがちだが、駅のホームや歩道などの路面に目をやると、500円玉大の黒いシミが数多く見つかる。これが吐き捨てガムの痕。路面にべったり張り付いているため処理が大変で、しかも、美観を損ねるばかりでなく、細菌の繁殖の温床となるため衛生面でも問題は大きい。

その対策として新樂さんが取り組んでいるのが「吐き捨てガム撲滅大作戦」。NPO法人環境まちづくりネットの一員として、平均月4回、都内各所で清掃活動を行っている。

ここで威力を発揮しているのがオリジナルのガム取り棒。先端に金属製のスクレーパー（ヘラ）が付いていて、さらにガムを溶かす

手づくりのガム取り棒に見たハンズのDIY精神

オフィス アコール

代表 新樂 智夫さん

溶剤ボトルを装着できる。立ったまま使えるため、しゃがんで作業をして腰を痛める心配もない。

実は新樂さんは東急ハンズの創業期のスタッフ。手づくりのガム取り棒にハンズのDIY精神を感じたのが、この活動を始めたきっかけだった。

「棒の開発者は様々な地域貢献活動に取り組んでいる実業家。塩ビパイプや金具を集めて組み立てた試作品を見て、ハンズっぽいなぁ」と親しみと感動を覚えたんです」

モノと活動を通して人と人がつながる

新樂さんは東急ハンズのスタッフを経て、環境をテーマにした雑誌の創刊や、企業のCSRコンサルティングなどの事業に携わってきた。「企業の社会に対して担う

モノ語り 1

手製のガム取り棒に感銘を受け
街の美化活動の
実践・普及に取り組む

責任や貢献活動についてコンサルティングしていく中で、現場で汗をかくことの重要性を再認識した」と、誰も取り組んでいなかった吐き捨てガム問題の活動に力を注ぐようになった。

ガム取り棒は昨年、東京都のトライアル発注制度に認定。これは中小企業の有望な新製品を自治体が買い上げる制度で、認定をきっかけに区や学校から注文が入り、これまでに約50本を納入した。

「清掃活動を行っている、見慣れない道具を使っているのが関心を引くのか、道行く若者が足を止めて作業に加わってくれることもあるんです」

今、求められているのは人と人との顔が見えるつながりだという新樂さん。手づくりの思いがこもったモノを通してまた人と人がつながっていく。

オフィス アコール
http://www.nira-accord.jp/

新樂さんの活動は、吐き捨てガム撲滅運動のほかにも多岐にわたる。「次世代のために、持続可能な社会・環境・資源をいかに維持するか」が最大テーマ

